

まほー使い【徳川まつり】支援小説

ももね@まゆすき p

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ミリシタ投票TCの支援小説となります
まつり姫を是非！まほー使いにしましょう!!!!!!

まほー使い 【徳川まつり】

支援小説

目

次

まほー使い【徳川まつり】支援小説

「んん? 朝からどうしたのです?」

妖精さんも魔法使いさんもたーくさんついるこの不思議な国には「まほー使い」と呼ばれているお姫様のような女の子がいるのです。それが私、まつりなのです。

「うつかり人間の女の子を呼んじやつた!? のですか!?

うつかり妖精さんが、間違えて人間の女の子をこちらの国にご招待しちやつたようです。

姫もさすがにこんな展開に驚きなのです。

「…うう、落ち着いてハーブティでも飲むのですよ。」

まほー使いといえばハーブティを飲むのが一番らしいかな?なんて思つて飲み始めたハーブティ。
ちょっと渋い…。煮出しそぎたのです…。

うつかり妖精さんは机によじ登つてマシュマロを食べ始めました。
「こらーこら、それは…姫のですけど特別に全部あげちゃうのです。」

マシュマロ、大好きなのですよ?…焼きマシュマロが。

別に皆さんから貰いすぎて困つてるわけではないのですよ? マシユマロ。

「妖精さんが呼んじやつた女の子は…特に姫のおうちでおもてなしするしかないのですよ。」

マシユマロを美味しそうに頬張る妖精さんを見て、ため息が溢れちゃいます。

「でも、この国のわんだほーでびゅりほーな世界観に女の子もうつとりするのです!!」

ただ、一つだけ懸案事項があるのです。

「がおがおーつ!!」

オオカミさんがこの辺を縄張りに活動を開始しちやつてるのです

よね…。

「がおーつ、食べちゃうぞがおーつ!!」

おかげさまで姫のおうちのそばには妖精さんくらいしか寄り付かなくなつてるとか内緒なのです。

ちよつとまつて。頭を整理しよう。

ふわふわと妖精さんが飛び回ります。

「誰のせいで姫はこんなに悩んでるのだと思つてるのでですかー?」

ぶにぶにとほっぺたをつづいて抗議です。

妖精さんはごめんねえと言いながら女の子を迎えて飛び立つていき……え?まだどうするか言つてないのです!!

かむばーつくなのです!!!

まつてなのです!!!!

ただし時すでに遅し。

妖精さん早すぎなのです…。すびーでいーなのも困り者なのです

…。

仕方ないから、冷めたハーブティを飲みながら姫は待つのです。
「甘すぎ、なのです…。」

妖精さんが食べ残したほんとは苦手なマシュマロを頬張りながら、
女の子が来るのを楽しみにしながら、のんびりと待つのです。

「どんな女の子が来るのかな。」

ちよつと不器用でとても優しい子かな?

男の人人が苦手でおどおどした子かな?

喋り方がのんびりしててほんわかした子かな?

とーつても元気いっぱいな子かな?

どんな子が来ても、楽しみなのです。

だから、プロデューサーさん

「もっと、姫にマシュマロくださいね?」